

多田政一博士の著書から (79) 詳細版

生命現象の極性について⑥ 〈後半〉

医療顧問 田中敏彦氏選

1935年 (昭和10年) 刊行『綜統醫學提唱論』より

[クライル博士の文章]

…吾人の論説は生命とは動的な物であり静的な現象ではないのであるといふ根本思想に基く物であり、換言せば生命現象の過程を組織學的構造如何によって定義せんと試みる事は恰も、太陽系の現象を太陽及遊星を構成せる元素如何によって理解せんとするに等しき妄見であると云ふ事に他ならない。太陽系の現象は動的な物である。物理學者が分子や原子や電子の現象が動的な物である事を發見したと同様に、生命現象も亦動的に理解されねばならない。生命過程は動的現象であり、さればこそ生命は唯その生成せるエネルギーの形式を以て理解され得る物である。

されば、如何なる生物の構造に關する知見も、その構造自體が生命全體としての動的過程の中で如何なる具合に利用されるのであるかと云ふ風に相關的思索をされねばならない。

[多田博士の文章の文章]

彼はたしかに實驗的動的に思索し、更にこの全體觀より見て必要な次の研究實驗に着手すべき事を指摘している。即ち局所的思索に止む現代醫學の如き研究より本當の生體の理解性は一步も進展しない事を意味している。更に換言せば局部的に手術を完行したから醫術は果したと、完全な手術より生まれる死は一顧だにしない完全なる外科の大家は生命を扱っているのだと云ふ事を忘れていると云ふ事ではあるまいか。生體は機械ではない全體性を持っている事を忘れているからであらう。物體は「巨視的」には確かに例へば食鹽の結晶體の如く靜的に見えるが、これを「微視的」に見れば量子軌道上の猛烈な旋轉<sup>※1</sup>平衡を營みつつある。クライルは、結論の他頁に更に曰く。

《語句説明》

※1【旋轉 (旋轉) せんてん】: 回轉する (繁体字 旋轉/簡体字 旋转)

### [クライル博士の文章]

…生体内に於ける「静且つ動的變化」の旋轉の様子は恰も虹の場合と酷似している。即ち虹に於ては一見あの靜的な定在的な色帯ではあるが、實際は光線が神速に落ち行く無数の水滴の中を透過する事により現出している物である。この様に虹が靜的に見えるのは各光波が各水滴に注ぐ効果が常に次から次へと一様であるが故である。他の言葉を以て云へば虹に無数の原子及分子の中に於いて起る一様なる電氣的歪みが連続して起った時生まれるのであって、その色帯は定在的な特色ある物ではあるが、これの構成に與りつつ<sup>※2</sup>ある原子なり分子は絶えず變旋しつつあるのである。

### 《語句説明》

#### ※2【與と與と興に関して】

[http://new5g00.blogspot.com/2013/08/blog-post\\_3.html?m=1](http://new5g00.blogspot.com/2013/08/blog-post_3.html?m=1)

與は「与」の旧字体です。

#### 【読み】

音読み「ヨ」

訓読み「あたえる」「くみする」「くみ」「ともに」「より」「あずかる」「か」

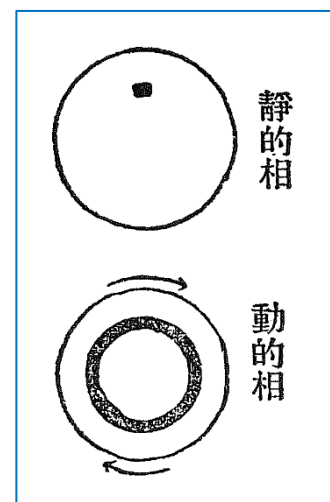
#### 【意味】

あたえる。授ける。

くみする。仲間になる。味方する。同意する。くみ。仲間。

### [多田博士の文章]

又しても彼の云ひたい所は、生命とは動的な過程により營まれる物であるが、一見靜的に見られる生理状態とは一定の調和平衡を経ての所産であると云ふ事であらう。即ち「動中の靜」である。もっと單純化した例を取って彼の上言を更へれば、上圖の如き（※右図）吹矢板の如き物でも靜的に見ると白板上の一黒點ありと見える。而しこれが猛烈に廻轉すると、この黒點は眞黒い輪になって見える。



所が吾々は動いて居るといふことは忘れて、この廻轉板を見て、この圓板にはこれだけ黒い圓線が畫いてあると誤認して吹矢をあてる様なのが現在の醫學である。熱が出たといふ症状は動的の結果で、これだけ黒くなるといふことは動いて居るから成立するのだと云ふ事を忘れてはならないと云ふのである。

さて、クライルに論説を引用しての極性の問題はさておき、次に興味あるのは皮膚ポテンシャル（電位）勾配の研究結果であらう。

古く（1898）、心臓電位曲線の發見より、體表の二箇所（心臓と皮膚）に電流計の二極を接續すると電位差が記録される事は知られている。

かうした電位差の配布は模型的には次圖の如きである事はどの生理學書にも見る如くである。

所がかうした電氣心臓曲線の問題はさておき、皮膚の電氣極性の問題について最近面白い實驗結果が發表せられている。

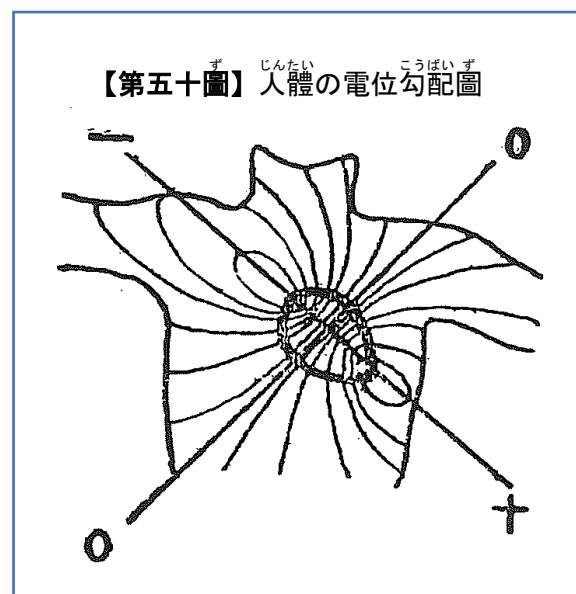
（略）上述の如く、吾人の皮膚上の二點を電位計に續くと、二點間に電位差の現はれる事に着目して研究したところ、この電位差が種々の環境上の影響（例へば光線、温度、濕度、等々）によつて瞬時的に變化するのみならず藥物の投與によつては勿論一舉手一投足及感情状態によつても變化し、疾病になればより明かに變化すると云ふのである。

例へば顔面上の前額と手掌上とに電極を連結しておくとき一定の電位差が示される。

この電位差は著しく一定性のある物と知られていたが、今足部を温湯或ひは冷水中へ入れると忽ち變化して來ると云ふ。

所が又若し吾人が風邪にかかると忽ちこの電位の一定性が失はれて著しく亂れて來る。さて面白い事にここで一つ「ハクシヨイ」と嘔をする時この電位がその度毎に正常に近づく様に變化する事が知られた。ムンク教授はかうした皮膚電位は人體の防禦機構として役立つ健康と疾病との於ける正常と異常のある事を主張している。

ケルレル教授もたくさんの實驗を重ねているが、例へばアトロピンやアドレナリン等により植物神經系統の交感及迷走兩神經系統の拮抗的緊張性を變ずるとこれ等の皮膚電位も變化する事



や、<sup>おんよく</sup>温浴により<sup>さんじゅう</sup>卅(30)分間位は上昇する事や疲労により著しく電位下降の起こる事等を明かにしている。

クライルの体内臓器の極性の問題と総合して考へる時、生體が無数の極性的全體として絶えず變化しながらもよく全體の調和平衡を保たんとする事をだれが否定できるであらうか？

かうした皮膚電位の問題から考へても又蛋白分解及びグリコーゲン分解代謝に於ける「生體放射線」から考究しても又「形成體」の問題の<sup>はつてん</sup>發展性を考へても東洋古來の<sup>こらい</sup>觸<sup>しよくしゅ</sup>手療法等の意義が全く非科學的だと誰が云ひ得ようか？ 余は全體科學、綜統醫學上からこれ等の學的究明もしたいが、これは後日他著に<sup>ゆだ</sup>委ねられるであらう。

要する「極性即全體平衡」の概念が念頭に浮かび上れば本節の目的は達するであらう。

## 解説

### 《所感》

綜統医学提唱論の第二部「醫科學上の平衡學說」も今回が終稿ですが専門的な研究内容が多かったように思います。

言いたいことは、クライル博士も多田博士も同じです。

クライル博士は、『生命とは動的なものであり、静的な現象ではない』とされています。この稿では、それを太陽系になぞらえて説明しておられます。

多田博士もまた、生體は全體性を持っている事を忘れていると指摘されておられます。そうです。私たちは生きているのです。静的な存在ではなくて動的な存在なのです。常に全體性を持って生きているのです。

多田博士が説明しておられるように、マクロの世界では静的に見えても、それをミクロの世界で見ると、活発に動いており動的なのです。

重要な点は「生命とは、動的な過程により営まれるが、一見静的に見られる生理状態とは、一定の調和平衡を経ての結果であり『動中の静』の状態」なのである。

更に「クライル博士の体内臓器の極性の問題と総合して考えれば、生體が無数の極性的全體として絶えず變化しながらもよく全體の調和平衡を保たんとしている」ことがよくわかると思います。(体内臓器の極性のバランス)

多田博士が最後にまとめておられるように「極性即全體平衡」の概念が念頭に浮かび上がれば、本節の目的は達するのでしょう。